

Book Review



フローチャート式 歯科医のための救急処置マニュアル 第3版

見崎 徹・伊東隆利・渋谷 鑛 編

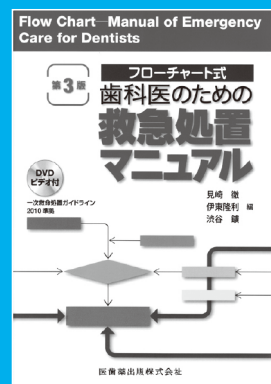


Reviewer

深山治久 Haruhisa Fukayama

(東京医科歯科大学大学院教授 麻酔・生体管理学分野)

B5判, 168頁
定価 7,140円
(本体 6,800円+税 5%)
医歯薬出版刊



救急処置と聞くと、すぐにAEDを思い浮かべる方が多いかと想像する。この数年で駅などの公共施設はもちろんのこと、学校など教育施設のほとんどに設置されているのは周知のことであろう。この意味は、医療者だけでなく一般人もAEDを使いなさい、すなわち救急（救命）処置をしなさいとの要請ということになる。

最近の研究（Kitamuraら、*Circulation*, 2012; 126 (24)）では、院外での心停止患者（年間約10万人）が1カ月後に社会復帰した割合（生存率）は、最近5年間で2倍に増加したと報告している。AEDの設置に加えて、救命処置についての知識や技術が普及してきた結果と解釈できよう。翻って、われわれ歯科医療者サイドの設備・知識・技術の進歩はどうだろうか。確率は低いとはいえ、十分な備えができていだろうか。歯科治療中に起こった偶発症に対する十分な備えが必要であることは、今さら言うまでもない。

そのためには、日ごろからの心がけが望ましいが、実は、救急（救命）に関する歯科医療者向けの書籍は、想像以上に多くの種類が出版されているし、定期刊行物でも特集として取り上げられることがある。

今回紹介する、医歯薬出版より発行

された『歯科医のための救急処置マニュアル』はそのうちの1冊となるが、タイトルの前に「フローチャート式」とあり、現在まで発刊されてきたこの種の成書とは一味違った構成になっている。フローチャートに沿ってページをめくれば、原因、症状そしてその治療法まで一目瞭然になるようにレイアウトされているのである。たとえば、「返事がはっきりせずに頭痛を訴えれば34頁を見なさい」とか、「返事をはっきりして呼吸も十分にあり、脈拍もしっかりしているのに胸が苦しいと言ったら24頁に行きなさい」などといった構成になっている。

既刊書では、偶発症の名称が最初に表示され、その原因、症状、対処法が述べられているのが一般的である。今、自身の目の前で起きていることを診断・処置するためには、その書のすべてを覚え、自分の頭の中で可能性のある偶発症を見つけ出してから処置することになる。編集を担当された日本大学の見崎 徹先生、伊藤歯科口腔病院の伊藤隆利先生、日本大学の渋谷 鑛先生は、めったにないことを完璧に記憶して取りかかるより、フローチャートを見ながら本当に正しい処置をしてほしいと願ってこの書を立ち上げたと思像でき、とても実践的な構成である。

それだけでなく、2010年に改定された一次救命処置を、歯科医院の実情に沿って解説していて、この特徴からも臨床に則した書と言える。たとえば、「歯科診療用椅子で胸骨圧迫を行う際には背もたれにドクターチェアをかませる」とか、歯科医院にはほぼ備わっている酸素ボンベの使用法を写真入りで説明するなどは、一般の救急蘇生の書籍には書かれていない。

そのうえで、このような事態に遭わないためにはどのようなことに気をつけるかが「偶発症予防のためにできること」として、丁寧に記載されている。たとえば、医療面接で「診療用椅子に座らせてから問診に入ってはいけない」とか、他科への対診を取るときには歯科的な略号を用いないなどは筆者も大きく首肯できるポイントである。

DVDは25分間で、付録というより本システムの大きな部分を占めている。全体を把握してから文字情報をしっかりと記憶にとどめるために、たいへん役に立つと思われる。

繰り返しになるが、多くの救急処置の書籍のなかでも本書はいくつかの特徴がある。この特徴を利用できる、歯科医療をこれから始める学生から経験を積んだ歯科医師まで、広く受け入れられるものと、ここに推薦したい。